岡崎市美博ニュース
【アルカディア】

Arcadia

OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS

VOL.31

村瀬恭子《This side of the green》
2005年

エッセイ
パリの極楽浄土 −モネ『睡蓮』の世界−

天恩寺と額田

「森」としての絵画：「絵」のなかで考える

トピックス
2006年 フラッシュバック

OKAZAKI MINDSCAPE MUSEUM
岡崎市美術博物館

ESSAY

パリの極楽浄土 ―モネ『睡蓮』の世界―

館長 芳賀 徹

2006年11月はじめに、ひさしぶりにオランジュリー美術館を見て来た。パリのテュイルリー公園の西端に、コンコルド広場に面して立つあのすてきな美術館だ。改築のために3年間ほど閉鎖されていて、私はひたすら再開を待ちこがれていたのである。

ここのルノワールもドランもマティスもみなすばらしい。ことにルノワールの摘みたてで葉っぱや蔕がついたままの真赤ないちごを皿に山盛りにしたのを描いた油彩の小品などは、じっと見ていると、いちごのあの粒々のある肌の舌ざわりも、香りとの味の甘酸っぱさも、そのまま伝わってきて、なんともなつかしい幸福な気分になる。同じ卓上に蓋をあけたままの砂糖壺や、半分に切ったレモンがおかれ、皿からこぼれたいちごが四個ほどころがっているのも、この食卓のよろこびとくつろぎの感をさらにつのらせる。ドランが姪の少女を描いた油絵も、私のこの館でのひいきの一点だ。薄いクリーム色の服を着た十二・三歳の少女が、白い靴下をはいた脚の片方の膝を椅子のはしにかけ、黒い革靴を軽く跳ねあげて、こちらを見ている。右手には大きな麦藁帽子、左手には自分で摘んできたらしい花の束。いかにもパリの良家の子女で、フランスの「エスプリ」とはこのわたしのことよ、といった風のおませな表情がなんとも愛らしい（このジュヌヴィエーヴさんは80歳になっても美しく豊かな感じの方だった。8年ほど前、私はパリ近郊の彼女の館を訪ねて、その手もとからドランの『狩』の一作を本館のために購入したのであった）。

しかし、そうは言っても、この「オレンジ畑」（オランジュリー）の美術館の最大のお目あては、誰にとっても、クロード・モネの『睡蓮』（1914～1926）のあの大画面だろう。昔は地下一階にあったのが、いまは上の階に移されて、天井からは自然光も入るようになっているらしい。大きな楕円形の部屋二つづきの全壁面に飾られた、モネ晩年のこの超大作は、8点すべてを合わせれば90メートルをもこえる長さになるのだろうか。

最初の室の4点は、『日没』から始まって、『雲』、『緑の反映』、『朝』、第2室への短い通路の部分は少々くびれて、一歩室内に入ると、またも壮麗で静謐な『柳のある朝』、『二本の柳』、『柳のある明るい朝』、『樹木の反映』の4点。――この連作こそ、20世紀ヨーロッパの最大にしておそらく最高の絵画なのではなかろうか。

展示室に足を踏み入れると、その深遠と雄大さに、驚くなどというよりも、声も出ないほどに圧倒される。いや、圧倒されるというのも、ティントレットとかルーベンスの馬鹿でかいだけの画面を連想させて語弊がある。見る者の身をも心をもこの睡蓮の池の上に漂わせ、さざ波のなかにふんわりと浮かばせ、水面に映る朝や夕べの光とかすかな花々の香りのなかにまぎれこませてしまう。何度目かにここに一緒に来ていた私の妻は、私のそばで「なんだか、この水の向う側まで吸いこまれてしまいそう」とつぶやいた。私は急に心配になって彼女の手を握ったほどだった。

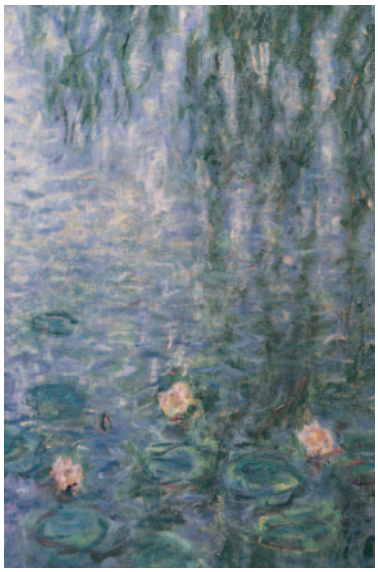
ギリシャ・ローマの神話の世界も聖書の世界も、史上の英雄や美女たちの劇的な世界ももちろんもう遠い遠い昔のはなしだ。モネたちが印象派と呼ばれていたころに描いていた女性像も、都市の街景や農村の風景さえも、どこかに遠くしりぞいてしまった。

老画家の薄らぐ視野のなかにあったのは、そしていま私たちの眼の前にひろがるのは、ただ、ジヴェルニーの池のはてしもないような水のひろがりと、その静かな面に映ってうつろう白い雲や金色の夕映えばかりだ。その水の夕映えのなかに水草のように漂うのは、さかさまに映るしだれ柳の葉の影であり、プラチナの色にかがやく朝雲の影が水の面に軽やかな筆触で描かれると、その反映の上にさらに軽やかにかすれた墨の線で描かれるのが睡蓮の丸い葉の群れである。

水のなかに空があり、その空や雲の上に睡蓮の花が黄やモーヴの色に咲き、さざ波になかばひたって葉が漂う。確実に動かずにあるのは岸辺に立つ数本のしだれ柳だけだが、その大きくひろがる枝と葉も、まるで天から降るもののように朝の明るいさざ波と睡蓮の群れの間にまぎれこんでゆく。水と空の光と木と水草とが、たがいに上になり下になりして幾重もの層をなし、たがいに映り映しあってはかない時のうつろいを語りかけている。今春、本館で予定している日本現代絵画展に、それらの作品の構造の複層性の比喩として「森としての絵画」との題名をつけるならば、地水火風の四大素を描きつくしてはかなさとさわやかさを湛えるこの老モネの大作こそ、さらにゆたかな意味で「森」そのものをなしている、といえるかもしれない。

19世紀後半のジャポニスムの先頭にも立っていた画家モネは、第一次世界大戦をはさんでこの『睡蓮』の大連作を描きつづけていたとき、その念頭のどこかに日本の屏風絵ばかりでなく絵巻物をも思い浮かべていたかもしれない。しかも90メートルの長さに及ぶこの油彩大絵巻には、私たち日本人から見れば「もののあわれ」の感性と思想さえひそめられているように見える。光と水と蓮が重なりあい、漂いつづけるこの画面の奥には、「もののあはれ」の情感にうるおう浄光の世界が宿されている。私の妻がこの画中に誘いこまれ、向う側に行ってしまいそうと洩らしたのは、その浄土を予感したからでもあったろうか。

パリの「極楽浄土」（シャンゼリゼ）は、すぐ近くにある大統領官邸エリゼ宮やシャンゼリゼの大通りではなく、このオランジュリー美術館の二室にこそ存在するのだといおう。



クロード・モネ 《睡蓮、柳のある明るい朝》部分
パリ、オランジュリー美術館

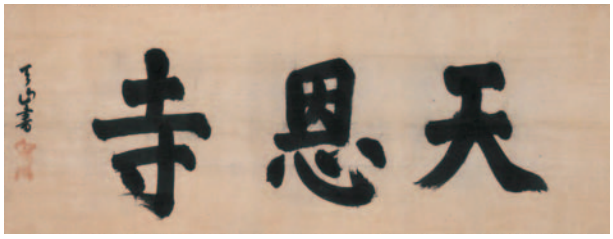
EXHIBITION

天恩寺と額田

学芸員 浦野　加穂子

当館では、平成19年2月4日まで、「額田―その歴史と文化―」を開催しています。本展では平成18年1月1日に岡崎市と額田町が合併したことを記念し、旧額田町域の歴史と文化を紹介しています。ここでは、同展に関連して片寄町にある天恩寺を通して額田の歴史を辿るとともにそこに伝わる寺宝についてご紹介します。

広沢山天恩寺は、臨済宗妙心寺派の古刹で、三河臨済宗の中心寺院です。寺伝では貞治元年（1362）［又は応安2年（1369）］室町幕府3代将軍足利義満が、初代尊氏の遺言により近江国（滋賀県）永源寺2世弥天永釈に命じて開創させ、永源寺開祖寂室元光を勧請開山としました。以後足利氏の厚い帰依をうけ、永徳2年（1382）には義満に近侍する源信氏から義満誕生日の祈祷のため、片寄郷など4カ所の寺領寄進を受け、これに応じて義満から自筆の山号・寺号が下付されました。大らかな書体で記された墨蹟の左下には義満の道号「天山」の署名と爵形印の落款があり、この寺号の筆跡を写した扁額が天恩寺に伝わっています。さらに応永30年（1423）4代将軍義持は天恩寺を祈願所と定めています。



足利義満墨跡額字「天恩寺」　室町時代　滋賀県・永源寺

永源寺は、寂室元光が康安元年（1361）に開いた臨済宗永源寺派の本山で、足利義満が祈願所とするなど足利氏と縁深い寺院です。

足利氏にとって三河は、承久の乱（1221）の後に足利義氏が三河守護、額田・設楽2郡の地頭に任命されて以来、代々守護を務め、一族・被官が多く居住する重要な勢力基盤でした。この地に義満が帰依した寂室を開山として寺院を建立することの意義があり、寂室にも教線を拡張するねらいがあったとみられます。弥天は天恩寺の他にも新城市作手の甘泉寺、禅源寺などを応安2年（1369）頃に相次いで開き、額田・作手にその教線を拡大していきます。天恩寺は三河臨済宗の拠点としての役割を果たし、江戸時代には塔頭2、末寺30ヶ寺を有する中本山となっています。

室町末期には足利氏の衰退とともに寺勢が衰えますが、天正年間（1573～92）頃には、作手より額田に勢力を拡大してきた奥平氏の庇護をうけ、奥平信昌が関東へ移った後は、豊臣大名吉田城主池田照政の保護を受けました。照政が海国寺（名古屋市熱田区）より招いた仁峯永善により、天恩寺は妙心寺派寺院として再興され、慶長7年（1602）には家康より片寄村79石余寄進の朱印状を得ています。このように天恩寺は額田の時の領主より代々手厚い保護を受けてきたのです。

このような由緒ある天恩寺には、数多くの寺宝が伝えられています。涅槃図などの仏画の他、臨済宗中興の祖、白隠筆のからうすの図（市指定文化財）や大燈国師像（春叢招珠筆）などの禅画が数多くありますが、ここでは山本梅逸の襖絵を紹介します。これは天恩寺書院の襖をその後掛軸に仕立て直したもので、四季の花々を描く「百花競妍」、海辺の松原を描く「海邊山水」、闘鶏する唐子を描く「唐児闘鶏」、花車を牽く唐子を描く「柳下清遊」、樹下に遊ぶ女人を描く「佳人逍遥」の合計24面があります。山本梅逸（1783～1856）は名古屋生まれで、名は親亮。張月樵らに画法を受け、晩年尾張藩の御用絵師となった近世南画の巨匠です。天恩寺襖絵「百花競妍」8幅目に記年と「春園処士親亮」の署名、「字亮之印」・「明卿氏」の印があります。「春園」は梅逸が20代前半に使用していた号で、この襖絵の記年から文化4年（1807）にはまだ「春園」と称していたことがわかります。梅逸は享和2年（1802）春に中村竹洞とともに京都へ旅だち、翌年京都を離れた後、文化文政年間は名古屋を基点としつつ近畿・山陽・北陸など全国を旅しています。天恩寺と梅逸の繋がりは明らかではありませんが、寺では梅逸が若い頃天恩寺で修行した際に襖絵を描いたと伝えています。いずれにしても「春園」落款の作品は数少なく、梅逸の襖絵作品の現存数も多くないため天恩寺の襖絵は貴重であり、梅逸が若い頃から優れた技術を発揮し、かつ大画面をまとめる力量を備えていたことを伺うことができる興味深い作品です。

山本梅逸筆　《百花競妍　一～四》　文化4年（1807）　片寄町・天恩寺

山本梅逸筆《柳下清遊　二・三》江戸時代後期

EXHIBITION

「森」としての絵画・「絵」のなかで考える

学芸員　千葉　真智子

3年前に当館で開かれた展覧会「現代の日本画―その冒険者たち　横山操から会田誠へ」を覚えている方はいるでしょうか。物故作家6人+現在活躍中の23人の作家による50作品を通して、大戦以降、現代に至るまで、「日本画」が、いかに問題化され、作品化されてきたかを時代を追って紹介した展覧会です。当館としては初めて、コンテンポラリーな作品を大きく扱い、会田誠さんと日展の土屋禮一さんが同席するという、通常では考えられないシンポジウムが実現するなど、新たな試みとなるものでした。

手塚愛子 《弛緩する織物》 2005 年

本展覧会は、その第2弾として企画されたものですが、「日本画」ではなく「絵画」、「戦後60年間を時間軸に沿って辿る」ではなく「ここ10数年の諸相を俯瞰する」と内容を改め、最終的に、19人の作家による新作を含むおよそ90点の作品を展示することになりました。「絵画」をテーマに選んだ理由は、一つ。作家にとっても、また鑑賞者にとっても、失せることのない絵画の磁力というものに迫ってみたいということに尽きるかもしれません。

20世紀後半には、既存のジャンルや、一つのカテゴリーに収まりきらない作品が多数登場し、最も伝統的な美術表現である「絵画」は、「死んだ」とまで言われてきました。彫刻の死、ドローイングの死、版画の死・・という言葉がおよそ発せられることがなかった一方で、絵画ばかりが、このように死の宣告まで受け、またそれにも拘らず、決して止むことなく、今日ますます多くの作家によって試みられているのは、どうしたことなのでしょうか。出品作家の一人、法貴信也さんの言葉は印象的です。「絵画でやりきれていないことが、まだまだたくさんあるから」と。

そこで、絵画のなかでどれほど多くのことが実践されているのか、出品作家の作品を例にかい摘んで見てみましょう。

さて、単純に分けることはできませんが、本展出品作品には、大きく分けて二つの傾向があると言えます。「絵画」とは何かという根源的な問いを、作品の中で実践していく、言い換えれば、作品自体が、絵画という存在を問い直すための実践の場となっているものと、絵画の中で何が可能か、より豊かなイメージを紡ぎ出し、強度を持った絵画を生み出すためにできることは何かを1枚の画面上で試行錯誤していくものです。

前者にあたるのが、例えば岡崎乾二郎さんの作品。白いカンヴァス上に明度の高いアクリル絵具が縦横に配された作品は、一見すると、無作為に自由に描かれたかのようで、あたかも戦後に隆盛した抽象表現主義のように、描く画家の身振りというものを感じさせます。しかし、2枚組の作品を左右よく見比べてみてください。すると2つのカンヴァスには、同じ形が色を変えてほぼ同じ配置で存在し、呼応し合っていることが分かります（そう思うと、今度はある形が一方の画面では欠落していることに気づき、その差異がますます見るものの感情を刺激します）。つまり、絵筆やパレットナイフが生み出した形は計算された形であり、自由な身振りによるものと思われた筆の流れも筆勢も計算されたそれなのです。戦後のモダニスム絵画は、平面性の追求という絵画の原理（とされた地点）に向かって突き進んだ―そして、行き着くところまで行って死を迎えた―と見なされてきまし

岡崎乾二郎

山の向こうの中腹のちっぽけな村はすでに見えなくなり、ふたたび春が巡ってきた。葡萄の木はあたかも塀の笠石の下を匍う病める大蛇のように見える。生あたたかい空気のなかを褐色の光が動きまわっていた。似たりよったりの毎日が作りだす空白は伐り残した若木まで切り倒すだろう。日々の暮らしのなかで樹木の茂みは岩のように突き出ている。（左）

自分の暮らした村がこんなに小さく思われたことはない。太陽が姿をみせた。背の高いポプラの林は風に吹き動かされる砂浜のような格好をしている。切れ目のないその連続を見ているだけで眼がくらんでくる。変り映えしない日々の連続に酔うことができたなら象や蛇をしとめた気にもなれる。蝶が舞うようにそんな風に彼はものを識ったのである。（右）

アクリル、カンヴァス　二枚組
各 180×130×5cm　2002

たが、絵画が最も「絵画」に接近したこの時代に顕在化した特徴こそ、非再現的で、イメージに代わり絵具の物質性や画家の身振りとが強調された、オールオーヴァーな画面構成でした。岡崎さんの作品は、こうした絵画の基本言語を作為的に使用（援用）しながら、そのズレを通して、絵画とは何かということを浮かび上がらせていると言えるでしょう。

あるいは、平面としての絵画から離れることによって、逆に「絵画」を強く志向する手塚愛子さんの作品。ほどかれ、だらりと垂れ下がった花柄の布は、通常の絵画構造においては、イメージを乗せる地として透明な存在と化しているカンヴァス（支持体）の存在を否応なく想起させます。これが、花を描いた絵画であれば、私たちは、そこに描かれた花の姿のみを見、その下にあるはずのカンヴァスを意識することは殆どないでしょう。こうして、手塚さんの作品は、「絵画」が空間の一部を占める、質量を伴った「もの」であることを示唆し、また別な言い方をすれば、三次元的な奥行きを有しているかに見える絵画が、単なる一枚の平面であるという事実を自覚させるのです。それは、「絵画とは、そもそも支持体の上の描かれたイメージのことを指すのだろか」という絵画の起源にまでさかのぼる問題意識―最後には、均一に塗られた1枚のカンヴァスに至らざるを得なかったモダニスム絵画が、単なる「もの」と化してしまう一歩手前に踏みとどまるために（絵画であるために）、最大の焦点となった「イリュージョン」という問題にも関わる― の表れと言えるでしょう。

さて、後者にあたるものとしては、村瀬恭子さんや法貴信也さん、また伊藤存さんの最近作に一つの兆候を認めることができます。それらの作品はいずれも、平坦な絵画面に複雑な空間構造を形成させようとする確固たる意思に貫かれていることを感じさせますが、興味深いのは、その具体的な方法として、三者ともに「森」を画題に取り上げていることです。その理由の一つには、木の枝葉の複雑な重なりや、木々の合間から突然開ける視界が織り成す前後を喪失させるような森の空間構成を借用することで、空間表現を深化させていることが考えられるのではないでしょうか。それは、安定した三次元空間の再現でもなく、またモダニスム絵画が行き着いた平面性にも回収されることのない、新たな絵画空間の探求であり、最小限の材料によって、1枚の画面の上に最大限のことを実践しようとする試みに他なりません。

加藤泉 《Untitled》 2004 年

そして、今や現代作家のなかで最もポピュラーな存在となった奈良美智さんや、近年注目を集める加藤泉さんの作品。具体的な背景描写が殆ど廃され、人間のイメージが画面を大きく占める構図は両者に共通で、自身の原風景や個人的な経験を軸にしながら、彼らの作品ほど、多くの共感を得、半ば普遍性を獲得しているものはないでしょう。弘前市にある酒造会社の空きレンガ倉庫を会場にして、大々的に企画された奈良さん（+graf）の展覧会「A to Z」には、莫大なボランティアスタッフが協力し、多くの観客が訪れていましたが、その作品に対する反応を見ていると、奈良さんの作品が人々の感情を丸ごと包み込む受け皿のような役割を果たしていることが分かります。絵画の歴史のなかで、一度は放棄された人間の姿をただ真正面から描くという選択によって、彼らは、絵画にこの上ない強度を付与しているのです。

様々なアプローチがあり、生み出される「絵画」は、それぞれ異なりますが、それらは全て、作家が制作の過程自体を、逡巡しながらも自らの内に血肉化していった結果に他なりません。タイトルが示唆するように、今回ご紹介する絵画は、初めから明確な全体像をもって描かれているというよりは、むしろ森の中を一歩一歩さまようように、思考の積み重ねによって紡ぎ出されたものなのです。この機会に、是非その作品に浸り、思うままに味わっていただきたいと思います。

村瀬恭子 《under the fern》 2006 年

法貴信也 《庭》 2001 年

伊藤存 《森》 2006 年

TOPICS

2006年 フラッシュバック

岡崎市美術博物館は、平成8年7月の開館以来、多くの皆様のお力により、無事10年目を迎えることができました。昨年はこれを記念して、2本の10周年記念特別企画展やさまざまなイベントを実施しました。

NHK新日曜美術館出演［2月26日］

2月26日放送の「ダリ・愛妻との半世紀」に村松学芸員がゲストとして招かれ、生前のダリと親交のあった女優の岸恵子さんと対談!控室で記念撮影。「美しかった!」と感激。

初夏の一景［6月13日］

東公園からカキツバタではありませんが、花菖蒲が届き、玄関前の池が八橋に見立てられました。

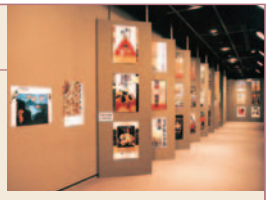
え!!ベリーダンス［5月21日］

ベリーダンスなしでは、アラビア文化は語れない。企画展「アラビアンナイト大博覧会」でのイベントの一環。ロータス&サマーラ・ダンス・グループのパフォーマンスに皆大喜び!

10周年記念特別企画展［7月6日］

「エコール・ド・パリ展」7月6日の無料開放デーに、日本初公開のモディリアーニを一目見ようと1,113人が入場。

美博10年の軌跡



オープン展の「天使と天女」から「エコール・ド・パリ展」まで61本の展覧会を開催。そのポスターを展示しました。「よくやってきたなー」感慨無量の荒井副館長。

アンケート結果

Q. どのポスターが気に入りましたか?
A. カラヴァッジョ、天使と天女、竹久夢二
Q. 印象に残っている展覧会は?
A. カラヴァッジョ、ホリ・ヒロシ、エコール・ド・パリ展
●両方とも堂々一位はカラヴァッジョで、開館以来の最高入場者数獲得展覧会!

こども芸術大学［8月20日］

「アートに生きる、アートで元気!」のワークショップでは学芸員実習生もお手伝いしてくれました。

10周年記念特別企画展 第2弾「徳川四天王」オープン:子孫集合［10月7日］

左から酒井家18代の忠久さん、本多家21代の隆将さん、榊原家17代の政信さん、井伊家18代の岳夫さんです。山形、東京、彦根より駆けつけてくださいました。四天王の揃い踏みは小牧・長久手戦以来?

忠勝公祥月命日［10月18日］

岡崎市と特にゆかりの深い本多忠勝公は慶長15年10月18日没。この日は無料開放デー。1,891人が入館。

やさしいミュージアム講座［10月11日］

10月から半年間、月に1回「いっしょに読もう新編岡崎市史（原始・古代）」（講師:荒井副館長ー写真中）と「印象派からシュルレアリスムまで」（講師:村松学芸員ー写真右）の2講座が始まりました。「各講座の参加者はどんな人たち?」「見かけ20代～50代の方々30人です。皆熱心だなー。」（担当:澤田ー写真左）

サタデーナイトシアター【今年はフランス! 恋の話あれこれ】

6月～11月まで毎月第2土曜日午後6時から映画上映会を開催しました。名作劇場に毎回、知的でおしゃれな若年・熟年カップルが鑑賞。

FUTURE

2007年度 展覧会のご案内

今回は新春号となりましたので、いち早く平成19年度の展覧会情報をお知らせします。
岡崎の芸術文化の創造と発信の場として、その存在を示すことのできる施設となるよう、展覧会の関連イベントも充実させてまいりますので、ますますのご愛顧をどうぞよろしくお願いします。

企画展 シュルレアリスム展 ―謎を巡る不思議な旅― 4月7日(土)～5月27日(日)

シュルレアリスム（超現実主義）は、心を開放することで自由と変革を求めた20世紀を代表する芸術運動です。当館は開館当初から「心を語るミュージアム」として、ダリ、ミロ、マグリット、エルンストなどの作品を収集、研究してまいりました。この展覧会は、その10年の成果を基に、シュルレアリストの作品を所蔵する美術館が協力・連携し、優品を一堂に集めて紹介するものです。

テーマ展 文様の世界展（仮称） 6月9日(土)～8月19日(日)

美術工芸作品に施された動植物・幾何学などの様々の文様に焦点をあて、その特徴と主題について紹介します。

企画展 ピカソ展 9月1日(土)～10月8日(月・祝)

20世紀美術最大の巨匠パブロ・ピカソ。本展では、旺盛な制作意欲により、次々に新しい様式を展開したピカソの全貌を、ドイツのルートヴィヒ美術館が所蔵する絵画・版画・彫刻・陶器等多彩な作品を通して紹介します。

特別企画展 大和文華館展 10月13日(土)～11月25日(日)

近鉄を母体とする財団法人・大和文華館（奈良）のコレクションは、国宝4件、重要文化財31件を含む古代から近代にいたる東洋の美術工芸品の約2000件。現在に至っても初代館長・美術史家の矢代幸雄氏の蒐集理念を引き継ぐとともに美術品の研究、展覧会の開催などとその館活動は国内外からも高い評価を得ています。
本展は茶の美術をテーマに大和文華館のコレクションで構成。禅宗美術から始まった唐物飾り、侘茶、近世茶道、近代数奇者までを絵画・書蹟・陶磁・漆工などの美術工芸品で紹介します。

企画展 中根家文書刊行記念展 12月8日(土)～2月11日(月・祝)

岡崎藩本多家家老の中根家に伝わる古文書が出版されたのを記念して、同家に伝わる岡崎藩の藩政改革のほか、武士の生活と文化に関わる資料を展示することにより、岡崎藩武士の世界を紹介します。

収蔵品展 新収蔵品展 2月16日(土)～4月13日(日)

平成18・19年度で購入・寄附・寄託により収集された収蔵品のなかから主なものを紹介します。

※上記展覧会予定は変更する場合もあります。

ホームページがリニューアル

見やすい　わかりやすい

岡崎市美術博物館は10周年という節目を迎え、ホームページを一新します。

新しいホームページでは、外観や周辺の画像が増え、これまでにない項目が新たに加わるなど、コンテンツが充実しました。
初めて訪れる方にも当館の雰囲気・魅力が伝わるページになっています。
2007年1月中にアップします。皆様どんどんご利用ください。

URLはこちら！ http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.htm

INFORMATION

■展覧会スケジュール

2006年12月2日(土)～2007年2月4日(日)
額田 ―その歴史と文化―

足利氏・松平氏などの三河地域の有力者や、作手・額田を中心に勢力を拡大した奥平氏などの足跡を中心に、原始から近代にかけての額田の歴史を貴重な美術工芸品や歴史資料で紹介しています。

2007年2月10日(土)～2007年3月25日(日)
「森」としての絵画：「絵」のなかで考える

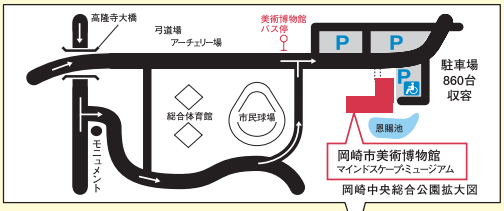
19名の作家による、新作を含むおよそ90点の作品を通して、今日の日本における絵画の動向と作家たちの思考の一端をご紹介し、今後あるべき絵画の姿について、思いを巡らす機会を提供します。

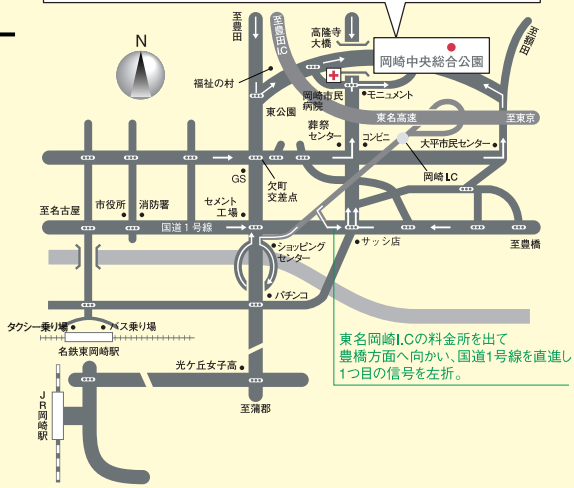
2007年4月7日(土)～2007年5月27日(日)
シュルレアリスム展 ―謎を巡る不思議な旅―

シュルレアリスム（超現実主義）は、心を開放することで自由と変革を求めた20世紀を代表する芸術運動です。この展覧会は、シュルレアリストの作品を所蔵する国内の美術館が協力・連携して、それらの優品を一堂に紹介するものです。

●開館時間／午前10時～午後5時
〈入館は閉館時間の30分前まで〉
●休　館　日／毎週月曜日（祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日）
年末年始（12月28日～1月3日）
※展示替えのため臨時休館することがあります。

◎公共交通機関／名鉄東岡崎駅バスのりば②より25分、
（名鉄バス）　「中央総合公園」行「美術博物館」下車徒歩3分
◎タ　ク　シ　ー／名鉄東岡崎駅から約15分
JR岡崎駅東口から約20分
◎自　家　用　車／東名高速道路・岡崎I.Cから約10分





OKAZAKI
CITY MUSEUM

【岡崎市美博ニュース／アルカディア】
●Arcadia　第31号　●2007年1月発行　●編集・発行　岡崎市美術博物館（マインドスケープ・ミュージアム）
岡崎市美術博物館
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内
TEL0564-28-5000（代表）
ホームページ　http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/ka111.htm

PRINTED WITH SOYINK
R100 本紙に古紙配合率100%再生紙を使用しています。